



平成14年 7月29日

東日本旅客鉄道株式会社
代表取締役社長 大塚 陸毅 様

社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
支部長 松原 忠策
保存問題委員会委員長 小西 敏正
西東京地域会代表 高松 英二

J R 国立駅舎の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴社におかれましては、日頃より文化の継承に深く理解をお示しになっておられ、また当協会の活動にもご協力下さり深く敬意を表します。

私ども日本建築家協会では、都市の中で、建築が景観・街並みを形成する重要な役割を担っていることを自覚し、また、それゆえ、それぞれの建築物が永く使い続けられることによってこそ、街並みに文化と歴史とが継承され豊かな都市環境が実現されると考え、当委員会を中心に活動を重ねています。

さてご高承の通り、「J R 国立駅舎」は、東京商科大学との契約に基づき、箱根土地株式会社で建築し、鉄道省に寄付した誓願駅で、大正15年4月に完成した市内では原宿駅舎に次いで古い木造駅舎で「関東の駅舎100選」にも選ばれております。大正末から進められた国立開発の中で、放射線状道路や街区の基点として計画され、建設後、幾つかの改築がなされておりますが、基本的には当初の構成を残して、長く街の中心にあってシンボリックな存在として住民をはじめとする駅利用者に親しまれてきています。

中央線連続立体交差事業計画の一端として、国立近辺も線路の高架化が進められ、それに伴い現国立駅舎は高架工事の支障となり、解体撤去が考えられていると伺っております。都のマスタープランの中で、都市交通のあり方を考えますと、連続立体交差事業計画により国立駅がそれに応じた施設に変わらざるを得ないことは十分理解できます。

しかしながら、国立駅舎の歴史、シンボリックなデザイン性、何よりも利用者や市民の強い親しみと愛着を考えますと安易に現駅舎を解体し、新しいものに建て替えるのではなく、現駅舎を十分活かす方法を検討されることを切望します。また、特に歴史性を考えた場合単に現駅舎のイメージを新しい駅に取り込めば済む問題ではないと思われまます。時代の育んできたものと新しいものが共存することで奥行きのある都市空間を形成していくことこそ今日求められていることと考えられます。利用者に親しまれた駅舎は、J Rの駅であると同時に、市民や利用者の駅でもあるわけです。交通の利便性や効率等の他に、文化の街、国立のシンボルとも言える国立駅舎に対する市民、利用者の声を是非とも反映させるよう保存活用に対する様々な可能性を十分にご配慮ご検討頂きたく、ここに要望書を提出させて頂く次第です。

社団法人日本建築家協会関東甲信越支部並びに同保存問題委員会としても、出来る限りの協力をさせていただき事を申し添えます。

敬 具